

## ボルノーの生涯と思想 (1)

広岡義之

オットー・フリードリッヒ・ボルノー (Otto Friedrich Bollnow, 1903-1991) は、1903年3月14日、当時プロイセンの一州であった北ドイツ、ポンメルンの州都シュテットィーン(Stettin)で、代々続いた教員の家に誕生した。ボルノーの父親オットー・ボルノーは、改革教育学運動の闘士で、そのためにボルノーもその運動を若い日より間接的に耳にしながら育っていった。第一次世界大戦後、父親はアンクラーム(Anklam)の小学校の校長となり新たに計画された学校を設立した。「その際彼は、とくに学級幼稚園(Schul-kindergarten)の設立に努力し、その学級を『フレーベル学級』(Fröbelklasse)と名づけ」<sup>1</sup>た。これはヘルマン・ノール(Herman Nohl, 1879-1960)によって高く評価された。ボルノーもまたこの小さな町で、少年時代を静かに過ごしてゆく。第一次世界大戦が勃発すると、ボルノーの父オットー・フリードリッヒが召集され、彼の家庭に暗い影を落とすまで、ボルノーの青春はこの僻地の町で格別なこともなく過ぎてゆく。

ボルノーの小学校・中学校時代は順調に経過し、高等学校で彼は文科ギムナジウムに進学し、最も有能な生徒の一人として、ギリシャ語とラテン語に励んだが、この時点では、まだ現代の精神的思潮に本気で関与していなかった。1921年、ボルノーはアビトゥア(高等学校卒業資格試験)を済ませて、ポンメルンの小都市から戦後のベルリンに出てゆく。画家になりたいとの思いも父オットー・フリードリッヒの反対で結局挫折する。その当時の社会は厳しい経済的状況にあり、「アカデミックな職業における就職の見通しは、極端に悪いもの」<sup>2</sup>に思われたので、実際の職業、つまり建築学の勉強を始めることになったが、しかしこれも一学期で中止することになる。というのも、当時のシャルロテンブルグ工科大学における授業は、一貫して

手仕事ばかりであり、ボルノーには無味乾燥なものに思えたからである。<sup>3</sup>

ボルノーは数学と物理の研究をベルリン大学で学び始め、さらにグライフスヴァルトとゲッチンゲンでその勉強を続けることになる。しかし、ここで専門的な学問以上にボルノーに決定的だったのは、少数の学生グループ「スクルト」(Skuld)で知り合った「青年運動」との出会いであった。その当時はボルノーは自ら振り返って次のように述べている。「硬化した文化から新たな、本来の、真の生活へと戻ろうとする渡り鳥運動の努力は、当時のわれわれを強烈にとらえた。長い、しばしば数週間におよぶ徒歩旅行は、われわれを自然や同じ志を持つ友達と、強く結びつけた。」<sup>4</sup>と。比較的年上の復員学生らが多くいたこの「スクルト」は、自己責任と内的誠実に裏打ちされた「マイセン方式」の道徳的気高さの漂う「教育団体」であったという。この時代をボルノーは特に感謝をこめて回想している。というのも、ボルノーがこの当時経験した青年時代の衝撃の成果をそれ以後の彼の学問的仕事で肉付けしようとしたからである。

ボルノーは数学と物理学の学問をないがしろにしたわけではなかった。とりわけマックス・プランク(Max Planck,1858-1947)がボルノーにとって印象深い学者であった。自然科学の勉強と同時に、ボルノーはE・シュプランガー(Eduard Spranger,1882-1963)とA・リール(Alois Riehl,1844- 1924)のもとで哲学や教育学の講義を聴講していた。しかし経済状況の悪化とともに、ボルノーはグライフスヴァルトに戻り、当地の小さな大学で学ぶことを余儀なくされてしまう。またボルノーの弟の大学進学も加わり、ボルノーはドイツ科学研究助成互助会の奨学金がもらえるまで第二の勉強を開始することができなかった。グライフスヴァルトの学生数の少ない大学では、それなりに厳しい勉強が課せられ、数学の講義と演習は二人だけの受講ということもあり、このことがボルノーの学問的心構えを強めることとなり、やがて経済的事情の好転とともに当時数学と物理学の研究の中心地ゲッチンゲンへおもむいた。ボルノーはボルン(Born)、フランク(Franck)、ヒルベルト(Hilbert)、クーラント(Courant)のもとで聴講し、若い日のフント(Hund)、ヨルダン(Jordan)、ハイゼンベルク(Heisenberg)に師事した。<sup>5</sup> 1925年、ボルノー22歳のとき、「酸化チタン、ルティンおよびアナタスの結晶格子理論」の研究で、ゲッチンゲン大学において博士の学位を取得した。しかし同時にそれと並んで、ボルノーは当時、ゲオルグ・ミッシュ

(G.Misch,1878-1965) やH. ノールを聴講し、かれらの演習に参加していた。

ボルノーは理論物理学研究所でさらに研究を続けることになっていた。その時、ボルノーの指導教官であるマックス・ボルン(Max Born,1882-1970)教授が一学期間、客員教授としてアメリカに招待され、その期間(1925年、26年の冬学期)を、オーデンヴァルト学園(Odenwaldschule)へ教師として赴任した。この経験はボルノーにとっては、「美しく、実り多き、本当に幸福な時間」<sup>6</sup>であった。学制改革の闘士である教師との共同生活、パウル・ゲヘーブ(Paul Geheeb,1870-)の畏敬の念を起こさせる風貌、さらに範例教授法で有名な、マルチン・ヴァーゲンシャイン(Martin Wagenschein,1896-)の天才的ともいえる教授術などと出会うことにもなる。そして信頼関係をもつことのできた生徒たちとの交わり、多くの思想・哲学書の読書の時間もとれ、ボルノーの人生のなかで将来を考える熟慮の期間となった。

その後、ゲッチンゲン大学に戻ったときにはもはや、ボルノーは再び物理学研究への興味は湧かず、今や全身全霊を打ち込むべきものは教育学と哲学のなかにしかみだせなかった。ボルンは共同研究の謝礼金を気前よくボルノーに譲ってくれ、それを学資にして、ボルノーは1学期をベルリン大学のシュプランガーのもとで哲学を、また別に美術史の研究に従事した。その後、彼は再びゲッチンゲン大学に戻ってきた。1927年、ボルノー24歳の夏、両親の願いに応じて遅ればせながら、数学と物理学の分野の高等学校教師の資格を取る国家試験を受験した。<sup>7</sup>

1927年、ハイデッガー(Martin Heidegger,1889-1976)の主著である『存在と時間』(Sein und Zeit)が出版され、この書は24歳のボルノーに深い影響を与えた。そのためにボルノーは1928年(25歳)のとき、マックス・シェラー(Max Scheler,1874-1928)に師事する代わりに、マールブルクのハイデッガーのもとに行き、さらにハイデッガーを追って2 Semesterをフライブルグまでついてゆき講義を聴講するほどの熱心さであった。

その後ボルノーは、1929年の秋、ゲッチンゲン大学のG・ミッシュとH・ノールのもとへ戻り、そこで「F. H. ヤコービの生の哲学」に関する論文に着手した。1931年ボルノーは『F. H. ヤコービの生の哲学』(Lebensphilosophie F.H.Jacobis)で教授資格を得た。この哲学と教育学の

結びつきのなかで、ノール、ミッシュ、ハイデッガー、ディルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911) の思想が交錯しつつ、みごとな思想的融合へと結実してゆき、ここにボルノー独自の創造的思想が練り上げられてゆくことになる。また同時期に、ボルノーは1929年から30年の冬学期に、生の哲学の端緒を論理学にまで高めたミッシュの講義を聴講している。このミッシュの講義は、ボルノーの学生時代にとって最も充実したものの一つで、事実、ミッシュの「ゲッティンゲン論理学」(Göttingen Logik)は、後のボルノーの方法論に強い影響力を及ぼし続けた。<sup>8</sup>

1927年から29年にかけて、ボルノーにとっては特に以下の三つの書物刊行というまったく震撼的な出来事と出会うことになる。すなわち、第一にディルタイ全集Ⅶ巻の出版(1927)、第二にハイデッガーの『存在と時間』(1927)、第三にミッシュの『生の哲学と現象学』(最初は Philosophischer Anzeiger, 1929-30, III, Heft 2 und 3; IV Heft 3 に発表された)であった。<sup>9</sup>

この三人の哲学者の思想は、ボルノーの主題を形成する基盤になるものであるが、ボルノーはすでにミッシュとノールに強く影響されていて、ハイデッガーの本来的信奉者になることはなかった。とはいうものの、ボルノーにとってハイデッガーの『存在と時間』の思想の斬新さは、これまで追及してきたものがすべて色褪せるほどの説得力をもつものとして捉えられた。『存在と時間』から、ボルノーは哲学的思索の真理追及の迫力を感じとり、ボルノーはただちにハイデッガーのもとにゆくことを決心する。しかし、ハイデッガーの新しい刺激を迎え入れた充実の時期もやがては終末を迎えることになる。ハイデッガーの壮大に展開された体系は人間存在の一面的な強調に基づいていること、たしかにこの根元的に吹き込んでくる思想の圧倒的な叙述は承認するものの、それによって解明されているものは、われわれ人間存在の一面にすぎず、多くのことがあまりにも単純化されているとの理由で、ハイデッガーの思想にこれ以上ついてゆくことができなくなる。<sup>10</sup>

すなわち、『存在と時間』において主張された、日常性を突破する「実存」概念にボルノーは深く共感しつつも、そこから「現存在の存在論」に進むハイデッガーの立場は、生の生動的な運動を実存の形式的構造に閉じ込める「袋小路」に導かれざるをえないこと、そしてそのことによって、「実存の歴史的創造性」が奪われる結果になることをボルノーは指摘する。換言すれば、

ボルノーの独自性は、ハイデッガーの人間存在理解の単純化から決別した結果、実存と生の緊張関係に立脚することによって生じたといえよう。後年、この問題は、「実存主義克服の問題」という観点から、『気分の本質』(Das Wesen der Stimmungen, 1941)、『新たな被護性』(Neue Geborgenheit, 1955)などの著作となってさらにボルノーの思索が深められてゆく。<sup>11</sup>

1929年に話しはもどる。この関連において、ボルノーは数年前から既に知られていたディルタイの思想に惹かれてゆく。そのためにボルノーは1929年の後半に再びゲッチンゲン大学に帰ることになる。当時ゲッチンゲン大学では、ノールとミッシュが歴史的な生の哲学をさらに各々独自に発展させつつあった。ボルノーにとっての「本来の師」であるこの二人は直接ディルタイに学び親交も深かったが、その性格においても学風においても極めて異なっていた。

ノールはヘルバルト(Johann Friedrich Herbart, 1776-1841)の後継者として、1920年から80年の空白後にゲッチンゲン大学に迎えられた。1920年のゲッチンゲン大学では、ノールを中心とする「ノール学派の英雄時代」と言われた。「文化の全領域を生におけるその根源に遡って関係づけ、文化をそれが生に対して果たしている機能においてとらえようとする生の哲学の立場を貫きつつ、H・ノールはおおよそ固定的なもの、死せるものに対立して、絶えず新たな生への情熱的要求のもとに一切を見ようとした。」<sup>12</sup> 後年、ボルノーの「教育現実の解釈学」の深化はこのノールの生の情熱にその源を発していると言っても過言ではないだろう。

ボルノーは1929年の終わりにゲッチンゲン大学に帰ってきたが、以前の1926年に一度ノールのもとに帰ったときには既にノール学派最初の熱狂的時代は過ぎた後で、ノールの哲学的思索の熱心な体系的構築の時代へと変化していた。そこでボルノーはむしろミッシュのもとで哲学の教授資格論文に着手することになるが、1931年には思いがけず、ノールのもとで助手になる幸運を得た。ノールは当時、1770年から1831年のドイツ精神史についての講義を「ドイツ運動」として論じていたが、彼の助手としてのボルノーの仕事は、ノールのドイツ運動の手助けを含んでいたと想像される。1970年にボルノーとF・ロディ(F.Rodi)との共同編集によってノールの『ドイツ運動——1770年から1830年にいたる精神史に関する講義録と論文集』(Deutsche Bewegung)が出版された。しかし当時のボ

ルノー自身は、ハイデッガーのもとで実存哲学を学んで帰ったばかりであり、古典的な陶冶伝統について過度に批判的言動をなしていたために、ノールとの間で多少の緊張感が漂っていた。しかし、1945年以降、ノールによって戦後すぐに発刊された雑誌『ザムルング』(Sammlung)の共同編集の仕事に見られるように、両者の間にはやがて曇りない人間的な関係が回復した。<sup>13</sup>

「ノールは同時代の重要な教育思想家、例えばT・リット(Theodor Litt, 1880-1962)やE・シュブランガーに比べると、刊行した著作の数はわずかであったが、むしろ論文と講演のほうが適わしく、また好んだ形であった」。<sup>14</sup> ノールの仕事は主として直接的な教授活動と講演であった。「若々しい気分の高揚のなかで聴く者をして夢中にさせ、こうして人間的に緊密に結ばれた弟子たちの集いを自分のまわりに形成し、この集いのなかで当時の教育学の諸問題が生き生きと論議された」。<sup>15</sup>

それに対してボルノーのもう一人の師ミッシュはまったく別の性格の人であり、ノールのような自発性に欠けていた。ミッシュはむしろ「倦むことなく掘下げる思想家であり、あらゆる一面的な単純化を嫌った。さまざまな問題をその複合性全体のなかに見、またこれらの問題を際限のない忍耐強さで慎重に(中略)『ほどこう』とした」。<sup>16</sup> ミッシュのこのような方法論はいつもボルノーの手本であった。ミッシュは当時新たに知られた後期ディルタイの遺稿を独自に解釈することによって、形式論理学の固定化から、思考と認識を解放し、生の豊かな意味と創造的な運動をとらえ直そうと試みた。

このサークルには、後にボルノーの思想に大きな影響を及ぼすことになるH・リップス(Hans Lipps, 1889-1941)(惜しくも第二次世界大戦中に没する)や、当時ケルン在中のH・プレスナー(Helmuth Plessner, 1892-)なども属していた。ノールとシュブランガーの系譜からは教育学、精神史を中心とする教育史、倫理学の領域の研究が、またミッシュやH・リップス、プレスナーの流れからは精神科学の方法論としての解釈学・言語論・認識の哲学などの諸研究が後年のボルノーの思想として結実してゆく。注目すべきは、この二つの系譜が相互に矛盾しつつも、ボルノーのなかで深く結合している事実である。<sup>17</sup>

1931年、ボルノーはゲッティンゲン大学で哲学と教育学を視野に納めた教授資格(ハビリタティオン)を『F. H. ヤコービの生の哲学』で獲得したとき、ノール、ミッシュ、ハイデッガー、ディルタイの各々の思想が対

決し、交錯しつつ、ボルノー独自の思想の深化統合と創造的な教授活動が始まろうとしていた。しかしこの希望は国家社会主義党(ナチス)の台頭とともに無残にも破られ、ボルノーの恩師らは次々と解雇され、ゲッチンゲン大学を離れていった。時代状況がもはや自由な議論を許さなくなり、ボルノーはやむなく教育学的研究を中断し、精神科学の哲学に専念せざるをえなくなる。1933年、先述した教授資格論文であり処女作となる『F. H. ヤコビの生の哲学』(Die Lebens philosophie F.H.Jacobis)が出版され、同年に『ディルタイ全集、第9巻(教育学)』の編集の仕事を引き受け、続いて『ディルタイ——その哲学への入門——』(Dilthey,1936)が刊行されている。これと並行してボルノーは、ドイツ観念論後期の思想、とりわけシェリング(Friedrich Wilhelm Joseph Schelling,1775-1854)などのロマンティックの神話学や自然哲学の研究を深めてゆく。

1938年、もはや何の希望も見いだせない状況のもとで、ボルノーは思いがけない偶然によってギーゼン大学の心理学および教育学講座に就任することになる。ギーゼン大学においてボルノーは、「教育学研究室をノールの精神のもとに築き上げてノールの精神を継続しようと試みた。」<sup>18</sup> 小さい規模ながらも、「責任のある教授活動の美しい時代」の幕あけであり、翌1939年には正教授に就任し、この時期に後のマインツやチュービンゲンで着手されるべき教育思想の歴史的研究の基礎固めがなされてゆく。この仕事は後にフレーベル没後百年に当たる1952年に『ドイツ・ロマン主義の教育学——アルントからフレーベルまで——』(Die Pädagogik der deutschen Romantik)として刊行される。この著作は教育史4巻のうちの一巻として計画され、その後弟子たちの強い要望で晩年まで新たに書き進められ数篇の論文に結実したが、単行本としてはこれ以外に刊行されることなくボルノーが他界されたことは惜しまれる。チュービンゲン大学に移ってからは、この教育史研究は中断された。

1941年には、ボルノーの最も重要な著書の一つである、『気分の本質』(Das Wesen der Stimmungen)が出版される。その少し後、人間における人間的なものへの内省から、『畏敬』(Die Ehrfurcht)が書き上げられたが、紙不足のため当時は出版不可能で、戦後の1947年ようやく出版の運びとなった。ボルノーはなおしばらくの間、ギーゼンで教授活動を続けたが、1943年、緊迫した戦局のなかで召集される。ヴェスタヴァルトにある僻

村に、ギーセン理論物理学研究所の共同研究者として兵役につくことを余儀なくされた。

第二次世界大戦が終結した後、ボルノーは鉄道の復旧も十分でないゲッチンゲンへと辿り着き、65歳に達したノール教授によって次の任地が定まるまでの間、温かく迎え入れられた。一切の伝統的理想が疑わしくなった完全な崩壊の現実のなかでいかにして健全な道徳的・倫理的な生活が可能であるのか、という哲学的な問いがすべての人々の心を深く動かしした。このような対話のなかで、ボルノーは、「高い理想」の領域がナチスによって徹底的に悪用されたあとで、なお道徳的な生活は可能なのか、という根本的な問いを提出した。<sup>19</sup> こうした対話のなかからボルノーの一連の倫理的・人間学的諸論文が産み出され、それらは1945年に、いち早くノールによって設立された雑誌『ザムルング』(Sammlung)に掲載された。そしてこれらの諸論文は『素朴な(単純な)道徳』(Einfache Sittlichkeit)という題名で1947年に出版された。さらにこの延長上に、『徳の本質と変遷』(Wesen und Wandel der Tugenden, 1958)が刊行されることになる。ボルノーの「素朴な道徳」という概念は、当時のスローガンにまで広がり一世を風靡した。ここでボルノーの主張したことは、ナチスの破局に直面して崩壊した「高い理想」の根底にそうした時代状況によって揺らぐことのない簡潔な道徳的諸現象が確認され、それは当然目立たぬ事実であるが、だからといって重要なものでもなく、むしろ高いエートスの諸形態を支えるものでありえた。たとえば、誠実(Ehrlichkeit)、信用(Zuverlässigkeit)、礼儀正さ(Anständigkeit)、親切心(Hilfsbereitschaft)などが、「単純な道徳」概念において脚光を浴びた徳目である。<sup>20</sup>

ボルノーは1946年の春、マインツ大学に招聘された。ここでの哲学および教育学の正教授としての新しい思想構築の実り多い美しい時代は、おそらく二度とやっこないほど力強さに満ちた精神生活であったという。それと同時に長年の精神的閉塞状態の後に、フランス占領軍の好意もあり、フランス思想界の新たな潮流との接触がなされた。フランスの占領軍は当時、フランスの精神生活、つまり展覧会、講演会、演劇や音楽会、書籍出版などの普及に努めていた。ドイツの従来は一切の価値が崩壊したさなか、唯一の誠実な答えとして現れたのが、フランス実存主義であった。元来、自己評価に厳しいボルノーであるが、このフランスの実存主義をドイツで認めた最初の

思想家が他ならぬボルノー自身であることを控えめな表現ながら述べているのが興味深い。ボルノーは、それに関連する論文の大半を『ザムルング』誌上で公表した。サルトル (Jean Paul Sartre,1905-1980)、カミュ (Albert Camus,1913-1960)、マルセル (Gabriel Marcel,1889-1973) らの実存的思想についてのボルノーの研究は、ドイツにおける先駆的研究の部類に入るであろう。<sup>21</sup> この視野のなかで、リルケ (Rainer Maria Rilke,1875-1926) の世界がボルノーによって発見されて、名著『リルケ』 (Rilke) が1951年に出版。また後年、『近代詩人の不安とやすらぎ』 (Unruhe und Geborgenheit im Weltbild neuerer Dichter) が1955年に、『フランス実存主義』 (Französischer Existentialismus) が1965年に次々と、戦後の閉塞状況を一掃するかのようにはとばしりてくる。

また戦争による精神的圧迫の解放の後のマインツ時代の学生と教授との内的結合についても、これほど深まった時期はないとボルノーは回顧している。このような情熱的な学生グループのなかから主として教職出身の学生を中心に教育学ゼミナールが形成され、後の教育学的人間学の基礎づくりが開始されていった。マインツでの充実した共同研究にもかかわらず、他大学からのいくつかの招聘の申し出を断った後に、1953年にボルノーはエドゥアルト・シュプラングァーの後継者として、チュービンゲン大学の招聘に応じた。ボルノーは当初さし迫っていた哲学上の諸課題に集中する計画を立てていたが、チュービンゲン大学でも、とりわけ学生たちの要望で教育学の関心がむしろさらに深められることになる。この多様な学生のサークルから、後に新設される教育大学の教授が数多く輩出されることになる。ボルノーはその代表としてG・ブロイヤー (Gottfried Bräuer)、K・ギール (Klaus Giel,1927-)、F・キュンメル (Friedrich Kümmel)、W・ロッホ (Werner Loch) の名前を挙げている。<sup>22</sup> こうした実り多い共同研究のなかから主な著作だけを列挙しても、『実存哲学と教育学』 (Existenzphilosophie und Pädagogik,1959)、『人間の節度と僭越』 (Maß und Vermessenheit des Menschen,1962)、『人間と空間』 (Mensch und Raum,1963)、『教育学における人間学的見方』 (Die anthropologische Betrachtungsweise in der Pädagogik,1965)、『危機と新しい始まり』 (Krise und neuer Anfang,1966)、『言語と教育』 (Sprach und Erziehung,1966)、『認識の哲学』 (Philosophie der Erkenntnis,1970) と、次々と力作が刊行されてゆく。

(次回へ続く)

註

- (1) 岡本英明著、『ボルノウの教育人間学』、サイマル出版会、1972年、2頁。
- (2) O.F.Bollnow, Otto Friedrich Bollnow im Gespräch. Herausgegeben von H.-P. Göbbeler und H.-U.Lessing, Mit einem Vorwort von Frithjof Rodi, Freiburg; München: Alber, 1983. S.13.  
ゲベラー・レッシング編、石橋哲成訳、『思索と生涯を語る』、玉川大学出版部、1991年、第1刷。
- (3) Vgl. H.-P. Göbbeler und H.-U.Lessing, a.a.O.S.13.
- (4) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、玉川大学出版部、1981年 改訂第2版4刷、303頁。
- (5) 川森康喜著、『ボルノウ教育学の研究』、ミネルヴァ書房、1991年、第1版第1刷、247頁参照。
- (6) H.-P. Göbbeler und H.-U.Lessing, Otto Friedrich Bollnow im Gespräch. S.16.
- (7) 岡本英明著、『ボルノウの教育人間学』、4頁参照。
- (8) 岡本英明著、前掲書、4頁参照。
- (9) 岡本英明著、前掲書、4頁参照。
- (10) Vgl. H.-P. Göbbeler und H.-U.Lessing, Otto Friedrich Bollnow im Gespräch. S.25.
- (11) 森田孝著、「O.F.ボルノー——教育への人間学的な問い——」、天野正治編、『現代に生きる教育思想—ドイツ(2)—』、1982年、初版、423頁参照。
- (12) 森田孝著、前掲書、423—424頁参照。
- (13) 森田孝著、前掲書、424頁参照。
- (14) 森田孝著、前掲書、424頁。
- (15) 森田孝著、前掲書、424—425頁。
- (16) 森田孝著、前掲書、425頁。
- (17) 森田孝著、前掲書、425頁参照。
- (18) 岡本英明著、『ボルノウの教育人間学』、8頁。
- (19) 岡本英明著、前掲書、9頁参照。
- (20) 岡本英明著、前掲書、10頁参照。
- (21) Vgl. H.-P. Göbbeler und H.-U.Lessing, Otto Friedrich Bollnow im Gespräch. S.29f.
- (22) 川森康喜著、『ボルノウ教育学の研究』、253頁参照。